

成實論師の思想に關する一考察

佐藤成順

一

開善寺智藏 莊嚴寺僧旻 光宅寺法雲の所謂梁の三大法師並びに智藏門下の龍光寺僧綽の四師は、梁代における成實論師として著名である。これら成實論師の著述は現存しないが、嘉祥大師吉藏の著作の中に成實論師の所説が傳えられている。吉藏はもつぱら破析の對象として成實論師説を擧げている。ここでは吉藏の論難を通して智藏・龍光の相即義について考説する。彼等の相即義はシナ佛教における初期の形態として留意すべきものがあるからである。

成實論師の相即義に關して、二諦義並びに大乘玄論二諦章には、智藏は「即是即」を、僧旻は「不異即」を、僧綽は「不離即」なる相即義を用い各々獨自の説を唱えていたが、これら三様の相即義の中で智藏の即是即と僧綽の不離即が當時廣く流布していたことを傳えている。

そこで、この不離即と即是即について現存の資料から知り

得る範囲内において略説すると、まず不離即については、「龍光明三諦各體一用三不離即」（大正四五・二二下）とあり、二諦の「體」については「三假爲俗諦體、四忘爲眞諦體」（大正四五・一〇五上）と具體的な説明がある。すなわち、空を眞諦、三假を俗諦とし、假有と空はその體は異なるが、しながら兩者は不離なる關係にあるというのである。「彼（僧綽）云空色不相離爲空即色色即空、……但不相離爲即也」（大正四五・二二下）とある一文によつて、僧綽は、色と空は不離なる關係にある。その不離なる關係が相即であると理解していたことが明らかである。ここに云う三假については、大乘玄論二諦章に詳説されており、それによると、「五陰人を成ずのごとく存在の相依性を表わす因成假、前念滅して後念起る」という相續關係を示す相續假、「君臣父子長短のごとく相待關係を示す相待假の三である。この三假説は、成實論の滅諦聚立假名品・假名相品に説かるるもので、成實論は假としての事象はこの相依・相續・相待の關係において成立し

ていることを明かしている。

次に、智藏の即是即については、「即是即」という用語の意味を端的に示した所説は見當らない。即是即の説明に際して挙げられている所説は次の二例である。

一 彼序云、一而不二、二諦即中道、不二而二、中道即二諦、故

以中道爲三諦體、(二諦義・大正四五・一〇八上)

二 開善解云、假無自體、生而非有、故俗即眞、眞無體可假、

故眞即俗、俗即眞離無無有、眞即俗離有無無、故不二而二

中道即二諦、二而不二二諦即中道、(二諦義・大正四五・一〇五

上)

これによると、智藏は假も空も二者ともに無自體であり、無自體というところに二者の同一性を求めて、空色は一體不二の關係にあると見ている。この二諦の體を一とするか異とするかという二諦の體に關する問題の論究、これは二諦説のシナ的な展開であるが、成實論師の間では、この問題についてかなり詳細な論議がなされている。二諦の體を一とするか異とするか、という考察は一面より見れば、眞諦空・俗諦有を各々眞理として認め二という表現に矛盾なく、しかも二者の對立を排除する二諦の間の相依相關性を求める要請より生じたものであろう。

僧綽は不離即を立て、智藏は即是即を唱えて、有空の間に「色即空空即色」の相即の理を説いている。しかしながら吉

成實論師の思想に關する一考察(佐藤)

藏は成實論師の説く有・空は偏有であり、但空であつて、有空の相即は成立しないと激しく論難している。吉藏がかように批判するのは、成實論師が理解する相即の概念に原因がある。それでは、成實論師の即の理解の仕方について共通した特質を、相即が成立しないと云う吉藏の批判を通して考えてみよう。もつとも、これらの相即義に關しては、先に挙げた程度の斷片的な所説しか傳えられていないので、方法として、吉藏が理解した成實論の内容と對照しつつ考察を進める。

二

吉藏は成實論の思想と成實論師の所説とを區別しているところも見られるが、相即の理が成立しないということに關しては全く同一の批判を加えている。三論玄義の成實論を破析する個處で十種の理由を列擧して、成實論を小乗の論であると論斷している。その十種の理由の中に、成實論の説く空は析空であり、但空であり、有無に偏するということ、相即を説かないということを擧げている。

しかし成實論の一切有無品には、「佛法中以三方便故說一切有一切無、非第一義、所以者何、若決定有即墮常邊、若決定無則墮斷邊、離此二邊名聖中道、」(大正三二・二五六中)とあつて有無の一邊に偏することを否定している。また立假名品には、「以三世諦故得成中道、所以者何、五陰

相續生故不_レ斷、念念滅故不_レ常、此離_二斷常_一名爲_二中道_一」（大正三二・三二七中）とあり、この世諦中道説には、假に即して中道の理を成ずる思想に發展する契機が含まれている。かように見てくると、この論の立場は必ずしも但有但空ではないのである。それにもかかわらず吉藏が論難する原因は、假から空に悟入する實踐方法（觀行）に問題がある。大乘玄論に成實論の所説を指して「小乘觀行、先有_二法體_一折_レ法入_レ空、故但見_二於空_一」（大正四五・一八下）と評するのはこのことを示すものである。

成實論では、一切諸法の構成要素を分析し、構成要素の和合によつて假法を表わすが、立無品に、逆に法を極微にまで分析していつて、法空を觀智することが説かれている。この現象を分析して空に至る認識過程を組織したものに立假名品・滅法心品・滅盡品等に説かるる假名心・法心・空心の三心説がある。假名心は「色香味觸によつて瓶あり」とか「五陰によつて人あり」とか云う場合の「瓶」とか「人」とかがあると同別する心である。そして、ここに先に言及した三假説が適用されて、「人」・「瓶」は因成・相續・相待の關係において成り立つと説明する。また法心は「實の五陰心あるを名づけて法心と爲し、善く空智を修して五陰空なるを見るときは法心は則ち滅す」とあるから、瓶や人の所依であるところの「色聲香味觸」・「五陰」ありとする心である。次に空心は

法心を滅した心であり法空を見る心である。滅盡定に入つて空心を滅することが示されている。この三者が連關した過程としてあり、三心を滅して無餘涅槃を證得するのである。

この三心の滅の過程について、一つの見方をすると、第一段階の假名心の滅においては、人・瓶の實體我は否定するが、人・瓶を成立せしめている色等の法の有は肯定している。そして次段階の法心の滅において、色等の法を分析していつて、そこにおいて法空を觀智する。さらに空心の滅において、空に執する立場をも否定する。とこのように進展の過程が段階的であるといえよう。吉藏の「小乘の觀行は先に法體ありて、法を析して空に入る」という批判は、以上のように三心説を段階的に見た批判である。

もしも、この三心説において、色空の相即を考えると、假名心では、假の假たることを分別し、次段階において、その假が空であることを認智するというごとく、次第的・漸次的に假から空への轉換が行なわれる。假を分析しつくすことによつて假は空と一體不二となる。そこにおいて始めて色即空の理が成立する。換言すれば、假・空を段階的に示し、分析という次第的過程を経て相即の理が成立する。したがつてこの場合の相即は、漸次的・異時的な意味における相即である。成實論の三心説に有空の相即を求めると、かような漸次的・異時的な「即」の概念が推求される。これを相即思想と見做

すことには問題もあり、また成實論の中に相即の理を求めること自體的をはずれたことであるかもしれない。しかし、今上記のごとく成實論に推求した即の概念が、成實論師の即の理解の仕方に関係があり、成實論師の相即義を考察する上の手懸りとしての試みである。

さて、以上の見解を念頭において、ひるがえつて成實論師の相即義を検討しよう。僧綽・智藏等成實論師が三假説を立てることは、先に言及したところであるが、三假説を立てることによつて、彼等の即の理解が、成實論に求められた即の思想と同様な異時的なものであると見做し得る。吉藏は成實論師の三假説に對して、三假の中に因成假を立てることは法體を立てることであり法を析して空理に至ることであり、それは小乗の觀行である、と批難している。この批判に基づいて色空の即を考えるならば、因成假を立てることに、相即が異時的になる原因がある。

また、吉藏は智藏の即是即に對して、汝の即是即において、色即空という時、色と空のいづれが先に存在するのか、というごとく空色の先在を問題にしている。そして有空の間に前後があれば相即は成立しないと難じている。さらに、「既無^二有無^一、論^二何物即不即^一、四句皆流、彼有^レ色有^レ空、以^レ色即^レ空故著^二前難^一」(大正四五・二二上)とある即是即に對する批判が擧げられている。この批判は、三假説・三心説と照合し考え

ることによつて、その意味が理解できるものであつて、この智藏説の空色の先在問題に對する攻撃、また彼(智藏)の説においては「色あり空あり色を以て空に即する、」という批判は、三假説・三心説の段階的な過程を指すものと推察される。智藏が色空の先在を問題にしていたということは勿論考えられず、有から空への轉換が漸次的であるから、相即が成立し得ない、という意味であろうと思われる。吉藏は、この即是即を批判する一節の結論として、自らの即の理解を「有名^二空有^一故、空有即有空、空名^二有^一故、有空即空有」(大正四五・二二上)と示している。「有名^二空有^一」、「空名^二有^一空」というのは、同一理體を指して有と云い空と云う、という意味であろう。同一理體を有と云い空と云うのであるから、有はそのままの位態において、すなわち即時的・同時的に空である。かように吉藏は即時的同時的に色空が相即するとみていることがわかる。結局吉藏は自らの即時的・同時的な即の概念を以て智藏の即是即には空色に前後があり、前後があれば、すなわち異時的であれば、眞の相即は成立し得ないと見るのであろう。

以上に、成實論師の相即義について、その特質として、即が漸次的・異時的な意味に理解せられていたということを考説した。そしてこれが、相即思想の初期の形態でもある。

(紙面の都合によつて註を省略する。)